やさしいまちに、なりたい。



令和4年度

指導の重点・主な施策

～とだっ子　やり抜く力で　未来に夢を～



戸田市教育委員会

戸田市教育委員会 facebook

指導の重点・主な施策について

昨年度までに小・中学校において全面実施となった新学習指導要領では、これまでも育成を目指してきた「生きる力」をより具体化し、これからの時代に求められる子供たちが身に付けるべき資質・能力が「知識· 技能」「思考力· 判断力· 表現力等」「学びに向かう力・人間性等」の三つの柱で再整理されている。子供たちがこうした資質· 能力を身に付け、生涯にわたって能動的に学び続けられるようにするためには、学習の質を一層高める授業改善の取組を活性化していくことが必要であり、特に「主体的・対話的で深い学び（アクティブ・ラーニング）」の視点からの授業改善をさらに充実していくことが重要である。

戸田市教育委員会では、「戸田市の教育振興に関する大綱」（令和3年4月策定）及び「第4次戸田市教育振興計画」（令和3～7年度）を基盤に、国や県の動向や各学校の実態を踏まえ、戸田市の子供たちがこれからの変化の激しい時代を主体的に生き抜き、よりよい豊かな未来の創り手となれるよう、各施策を実施する。

この「指導の重点・主な施策」は、各学校で行う教育活動の指針を編集したものであり、手の届くところに置かれ、授業づくりの一助となるよう作成した。各学校においては、自校の実態に即して本冊子を十分に活用し、令和4年度の指導の重点を明確にし、学校教育の充実を図られたい。

第４次戸田市教育振興計画

基本理念：生き生きと　共に育む　教育のまち　戸田
キャッチフレーズ：とだっ子　やり抜く力で　未来に夢を
方針１：子供たちが可能性に挑戦し続ける力を育むための学びの実現
方針２：多様性を尊重し、全ての子供たちが力を発揮できるような誰一人取り残さない学びの保障
方針３：地域・家庭・産官学民などの多様な主体による学びの提供
方針４：個別最適な学びの実現に向けたＥＢＰＭの推進

計画本文、紹介動画はこちら

■令和4年度　戸田市立小・中学校における標準授業時数

〈小学校〉

	各教科										特別の教科道徳	外国語（英語）活動	総合的な学習の時間	特別活動	総授業時数
	国語	社会	算数	理科	生活	音楽	図画工作	家庭	体育	外国語（英語）					
第１学年	306	—	136	—	102	68	68	—	102	—	34	—	—	34	850
第２学年	315	—	175	—	105	70	70	—	105	—	35	—	—	35	910
第３学年	245	70	175	90	—	60	60	—	105	—	35	70	35	35	980
第４学年	245	90	175	105	—	60	60	—	105	—	35	70	35	35	1015
第５学年	175	100	175	105	—	50	50	60	90	70	35	—	70	35	1015
第６学年	175	105	175	105	—	50	50	55	90	70	35	—	70	35	1015

●小学校中学年における外国語（英語）活動の実施について

本市全小学校は、中学年の「総合的な学習の時間」を３５時間削減し、外国語（英語）活動を35時間実施することが可能となっている。これは、全小学校が学習指導要領等の教育課程の基準によらない特別の教育課程の編成・実施を可能とする教育課程特例校（令和２年１月２２日文部科学大臣承認）となっていることに基づくものである（期間は、次期教育課程変更日まで）。

※新曽小学校・戸田東小学校については、中学年外国語（英語）活動の実施とともに、別の教育課程特例を申請中（令和4年3月現在）

●小学校学習指導要領における外国語（英語）活動及び外国語（英語）への短時間学習の導入について

本市の中学年の外国語（英語）活動については、平成１５年度から３５時間実施しているが、さらなる英語教育の充実を図るために３５時間増とし、合計７０時間とする。中・高学年の３５時間分の実施方法については、１５分間の短時間学習を３回行うことにより１単位時間（４５分）に換算することとする。なお、低学年の外国語（英語）活動については、余剰時間や短時間学習も含めて２０時間程度とする。

〈中学校〉

	各教科									特別の教科道徳	総合的な学習の時間	特別活動	総授業時数
	国語	社会	数学	理科	音楽	美術	保健体育	技術・家庭	外国語（英語）				
第１学年	140	105	140	105	45	45	105	70	140	35	50	35	1015
第２学年	140	105	105	140	35	35	105	70	140	35	70	35	1015
第３学年	105	140	140	140	35	35	105	35	140	35	70	35	1015

※戸田東中学校については、上記内容とは別に授業時数特例を申請中（令和4年3月現在）

アクティブ・ラーニング指導用ルーブリック

アクティブ・ラーニングの視点から、**不断の授業改善**を図るため、授業を自己・他者評価する際の基本的な５つの視点を**指導用ルーブリック**として示した。

視点１と視点５は、目指すべき目標と学びの評価であり、これらは**授業の根幹**と捉える。

1 児童生徒が目標を理解し、課題に興味をもって取り組んでいたか。
【目指すべき目標・評価規準の設定等】

□指導計画に基づき、適切な目標（資質・能力の三つの柱に基づき「何ができるようになるか」）が設定できたか。
□本時の目標に正対する評価規準・評価方法が設定できたか。
□児童生徒の学習意欲を高められる導入場面であったか。（学習問題や課題の工夫、提示方法の工夫など）

2 児童生徒が自分の考えを表現することができていたか。
【主に主体的な学びの視点】

□本時の課題を正しく伝え、見通しをもたせることができたか。
□自分の考えを表現することができるように、（主につまずいている児童生徒たちへの）支援方法を準備し、支援することができたか。
□自分の考えを表現することができるように、教具の工夫、適切な時間や場の設定等の準備ができたか。
□学習活動は、目標の実現につながっていたか。

3 児童生徒が友達の発言を受け止め、自分の意見と比べていたか。
【主に対話的な学びの視点】

□児童生徒の考えを広げ深められるような、学習形態（個人、ペア、グループ、全体）は設定できたか。
□児童生徒の考えを広げ深められるよう、教具（タブレットＰＣ・具体物等）を工夫し用いていたか。
□目標の実現につながるように児童生徒の考えを可視化（板書、ＩＣＴ等を使って示すこと）できたか。

4 児童生徒が思考・判断・表現する活動を通して「見方・考え方」を働かせていたか。
【深い学びの視点】

□児童生徒が本時に働かせるべき「見方・考え方」は、明確であったか。
□児童生徒が「見方・考え方」を働かせることができる学習活動を設定することはできたか。
□児童生徒が働かせていた「見方・考え方」を可視化する（板書・口頭等）ことはできたか。

5 児童生徒が「分かったこと」「やったこと」や「できたこと」など、学びの成果や課題を実感していたか。
【学びの評価・振り返り】

□評価規準・評価計画に基づき、本時の児童生徒の学習状況を捉え、個々・グループ等へ支援する（キャッチ＆レスポンスする）ことができたか。
□目標に準拠した指導と評価となるよう、学習の状況を適切に評価することができたか。
□児童生徒が本時の学習を振り返ることができる場面が設定できたか。

視点１や視点５に示されているように、子供たち**一人一人の資質・能力を確実に育んでいく**ためにも、今後もタブレット端末を活用した『主体的・対話的で深い学び』をより一層推進することが大切である。

例えば、これまでワークシート等を使用した学習場面についても、より効果的・効率的な視点から見直し、**タブレット端末を活用した指導への転換**を検討する必要がある。



R3学校訪問での達成状況

授業づくりのポイント
～エビデンスに基づくグッドプラクティスの紹介～

子供の学力を伸ばした先生に共通する授業（目指したい授業像）

1．子供たちが**主役**となり、**挑戦**したことを教師が認め、励ましのある授業
2．子供たちが**協働的な学び**を通して学びを深めている授業

具体的場面

ＡＢＣ3つの領域からのアプローチ



A 子供と教師の関係（学級経営、授業規律など）

①子供たちの**発言**（つぶやきも含む）**を取り上げ、考えを引き出す**。
②ＩＣＴの活用や机間指導等を通して、子供の**状況を把握し、取組を見届ける**。
③個別の**声かけ**や**称賛**をしている。

そのために…

①：発言した子供と教師のやり取りに終始せず、**全員に思考を促す発問**をする。
②：子供たちが「できたこと」を実感できるような、**フィードバック**の時間の設定をする。
③：個別最適な学びや自力解決などを通して一人一人の子供の伸びや変容を把握する。

B 子供同士の関係（学級内の雰囲気）



①**子供同士の学び合い**の時間がある。
②グループ内全員が互いの意見を伝え合っている。
③間違えても受容される学級の雰囲気である。

そのために…

①&②：子供たちが**自分の考えをもつ**ことができるような課題設定をする。
①&②：教師が**「5W1H」**を意識し、明確に伝わるような指示や発問をする。
③　：子供が頑張って**挑戦したことを認める**姿勢を教師が示す。

C 指導方法の工夫



①活動の途中でも必要があれば、修正や補足、確認、焦点化などをしている。
②学んだことを**アウトプット**する機会を設けている。

そのために…

①：教師が１時間の授業の中で**学習のゴール、目指すべき子供の姿**等を明確にしておく。
②：**多様な考え方（解き方）**が生まれるような課題を設定する。
②：子供たちが**協働的に解決したくなる**ような課題を設定する。
②：既習事項の確認、復習をしてから本時の課題に取り組む。

【参考】令和２年度
指導の重点・主な施策
３，４ページ

【参考】令和３年度
指導の重点・主な施策
３，４ページ



ABCの領域は、互いに関連していることから、全ての領域からのアプローチが大切です。

戸田型ＰＢＬ（Project-Based Learning）の考え方4

戸田型ＰＢＬをより質の高いものにするために、「活動」や「学び」をホンモノ化するポイント

［参考］
戸田型PBLについての解説動画等

「活動」がホンモノになっているか見取る視点

Q. 本当にその問題が自分ごと（切実なもの）になっているか？

そのために伴走者として教師は…

- ☑「高齢者のため」といった抽象的な対象ではなく、「○○さん（及びそのような人）のため」となるよう、**特定の個人等の強い思いや願いと深く関わる**ことができるようにし、アンケートやインタビュー、行動観察などで**検証できる目標**を設定するように促す
- ☑ もしくは、「漢字が嫌い」「ゲームが好き」など、**自身の身近な生活における強い感情**からスタートし、結果として他者のためにもなる活動に繋げつつ、アンケートやインタビュー、行動観察などで**検証できる目標**を設定するように促す
- ☑ 自分たちがまだ達成できていないことについて、校内や地域を啓発するなど、自分が問題の枠外にいる感覚で問題に向き合うことのないよう、学習活動を随時振り返りながら「**まずは自分（たち）はどうか**」と足元を問い続けるように促す

▼活動がホンモノ化すると



「学び」がホンモノになっているか見取る視点

Q. そのテーマや問題に関わる「本質」まで掴むことができているか？

そのために伴走者として教師は…

- ☑ 活動を振り返り、身に付けたスキルや方法論を自覚化するだけでなく、そのテーマや問題の「内容の奥深さや本質（**概念的な知識**）」を、自ら見出すことができるような単元をデザインするために、あらかじめ教師自身がそれを探究し、言語化しておく
- ☑「給食の残食があるので給食のよさを伝えよう」といった、問題に対してすぐに解決策（HOW）を出すのではなく、「なぜ給食が残るのか」という**原因（WHY）を追究**したり、先行事例を調べて分析する活動をした後に解決策を考えたりするように促す
- ☑ アンケートやインタビューの回答、あるいは議論や批評会等から得られる忌憚のないフィードバックや、失敗も含めて実際に行動した結果など、**自身の認識や仮説と「現実とのギャップ」に直面する状況**を何度も繰り返し、人や物事の本質に迫れるよう支援する

▼学びがホンモノ化すると



ホンモノ化の土台となる組織的な取組

- 「指導の重点・主な施策」の冊子を活用し、**すべての学校活動**において子供を主語にした学びを目指している
- 学校教育目標に基づき、生活・総合や各教科等を**横断的・系統的**に設計し、全校で組織的に取り組んでいる
- 子供同士だけでなく、学校全体として安心して自由な発言ができる**心理的安全性**を意識した環境作りをしている

ICTの文具化に向けて －戸田市版SAMRモデル－

SAMRモデル（Ruben.R.Puentedura 2010）とは、ICTが授業にどのような影響を与えるのかを示す尺度でありSAMRの4文字のアクロニムによりいくつかの解釈がある。戸田市では以下のように捉え、令和4年度においては**市内全校でA段階を当たり前に、M段階の実践の創出を推進**し、引き続き、児童生徒の「学びと愛用」のPCとしてICTを文具化した活用を目指す。

S【代替】Substitution	A【増強】Augmentation	M【変革】Modification	R【再定義】Redefinition
アナログでできたことをデジタルで代用	デジタルの特性を生かして、学習効果を増大	授業デザインが変容し、新たな学びの実践へ	実社会の課題解決や新たな価値の創造
★紙でもできる活用にとどまる	★デジタルの利用により付加価値が加わる	★個別最適な学びや協働的な学びの実現に近づく	★実社会の課題解決や新たな価値を創造する
デジタルの特性が発揮されていない	活用経験・スキルが蓄積	授業観・教師の役割の変容	社会に開かれた活用
（例）教師が… ・デジタル教科書で本文を提示する ・ファイルを共同編集させる ・ドキュメントに作文を書かせる ・PDFで課題を配布、回収する ・大型提示装置を板書代わりに使う ・ビデオカメラの代わりに、端末で撮影させる ・e-BOOKで読書させる ※これらを子供が自ら選択する場合はA、M段階にある	（例）教師が… ・全員の考えを共有して、思考させる ・ファイルを共有して共同編集させる ・コピペや校正の機能を使って文章を推敲させたり、繰り返し操作・試行錯誤させたりする ・コメント機能で相互評価をさせる ・データの即時集計や可視化をする ・録画して技能をモニタリングさせる ・Web上の有用なコンテンツを活用させる	（例）子供が… ・スタディ・ログを積み重ね、レコメンド機能等も活用しながら、学習調整を行う ・反転学習を行い、学校では対話や協働作業など活動を中心に学ぶ ・ブレンディッド・ラーニングの手法などにより主体的に学ぶ ・校外とオンラインでつながり、共同でPBLに取り組む ・A段階までの取組を自ら選択して活用する	（例）子供が… ・学習成果をSNSやHPを通して社会にリリースする ・最新テクノロジーを積極利用する ・ICTによるタスク管理や相互コメント等によってプロジェクトを進行・完結する ※新たな可能性が開かれる段階のため、「M」以上の取組を「R」と捉える

※各段階（例）は一例であり、前後の段階においても行われることがある。ただし、各段階間の学びの質には差異がある。

教具的活用　教師が活用の指示 ➡ 活用場面を子供と考える ➡ 活用場面を子供が決める　文具的活用

情報モラル　心情規範・他律的・同一・自制 ➡ ➡ ➡ 行動規範・自律的・多様・活用　デジタルシチズンシップ

Digitization　Digitalization　Digital Transformation

以下は、A・M段階の例である。「学びの質の向上」を目指し、従来の指導法に捉われず、ICTの様々な可能性を子供たちの学びに生かしていきたい。

「A（増強）」を当たり前に、「M（変革）」段階の実践の推進を

A

◆理科における実践の例

・グループごとの実験結果を、ファイル共有したGoogleスプレッドシートの表にまとめさせる。教師はその様子をリアルタイムで確認して支援を行い、子供に他グループの結果も比較、分析・考察させる。すべての結果は、即時的にグラフにして可視化もできる。

・Web上のコンテンツを活用し、裸眼や双眼鏡で見ることのできる星空と同等のリアルな3Dコンテンツの星空を観察させる。

M

◆図画工作・美術における実践の例

・年間を通して、Googleサイトに制作した作品をアップ（制作の過程や振り返り、コメント機能を活用した子供同士の相互評価などもあるとよい）する。単元のはじめや終わり等に振り返らせ、自己の変容や伸びを確認させる。

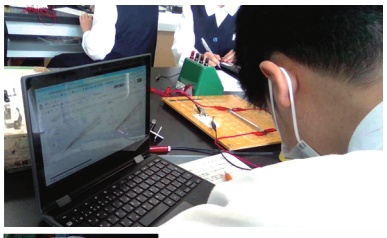
M

◆総合的な学習の時間における実践例

・Web検索の他、Googleフォームによりアンケートをとったり、フィールドワークで画像・動画を撮影したりするなどして情報収集をする。

・集めた情報を、思考ツール（共同編集）を使って整理したり、オンラインで外部とつながり、活動への助言をもらったりする。

・学習のアウトプットでは、プレゼンテーション以外にもプログラミングや動画、音楽表現、HP作成など多様な方法でまとめ・表現する。
※これらを子供が指示なく行えている状態。

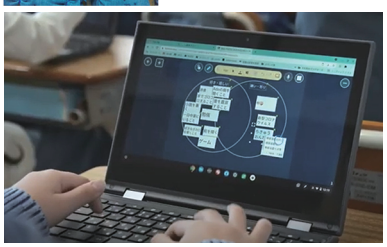




コアラ君とウサギさん



キャンディーとマシュマロ



課題解決のヒント

文部科学省や戸田市プログラミング・ＩＣＴ教育研究推進委員会等が作成した資料等を参考に、各学校の実態把握や課題に応じた取組を行う。

戸田市ICT活用推進ポータルサイト

【主なリンク】
- 文科省StuDX Styleや各自治体作成の実践事例など
- 過去の「戸田市 指導の重点・主な施策」ICT活用に係るページ
- ICTリテラシー系統表（戸田市）
- Google Workspaceやロイロノート・スクール、ミライシード等、戸田市が利用するシステムのマニュアル資料
- 情報モラル、著作権教育等の参考資料
- その他資料　（今後、随時更新）

情報モラル教育からデジタルシチズンシップ教育への質的転換を

制限・禁止のみでは端末の活用は進まず、個人所有のプライベートな端末活用が進む。また、ＩＣＴ活用においては、教師の活用スキルを児童生徒が上回っていたり、端末やソフトが定期的にアップデートされたりするため、すべての不適切な利用や機能を網羅的に把握し、先回りしたルールづくりを行うことは困難である。

ＩＣＴの文具的活用を進めていくためには、これまでの情報モラルからデジタルシチズンシップへ、学びの質的転換を目指していく必要がある。

情報モラル

「あなたは何をしてはいけないか」

- ＩＣＴの活用は限られた場面
- デメリット（トラブル等）のリスク管理、主に個人の安全な利用に向けて
- 教師が主導（答えを与える）
- 心情規範・他律的・同一・自制

ある場面を取り上げて、何がいけなかったのか、どのような危険があるのかを考えさせ、個人が「思いやりをもつことが大切」や「〇〇はしない方がよい」的な感想をもてるようにする。

質的転換

デジタルシチズンシップ

「あなたは何ができるか」

- ＩＣＴの活用が前提、かつ日常利用
- デジタルのメリットを踏まえ、情報社会を築く責任ある主体的利用
- 学習者が主体（答えを創り出す）
- 行動規範・自律的・多様・活用

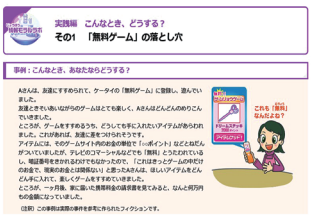
約束を守ろうとする際に生じる様々なジレンマに対して、社会をつくる一員としてどう行動・選択するか、選択肢のメリット・デメリットは何かを整理し、多様な価値観を認めながら具体的で前向きな行動・対処方法を考える。

デジタルシチズンシップ教育の実践に向けたステップ例

ステップ１

既存の情報モラル教材を利用し、デジタルシチズンシップの要素を取り入れた実践に取り組む

ＩＣＴ活用を前提に、日常の中で生じるジレンマに対して、社会をつくる一員としてどう行動・選択するか、それぞれのメリット・デメリットを検討し、前向きな対処方法を考える。



戸田市情報モラルスクール



LINE社と連携した教材

ステップ2

児童生徒主体の取組を全校で推進する

端末利用等について児童生徒の取組を、学級・学年・学校単位で推進する。その他、最新のコンテンツ等を積極的に利用し、知見を得ながら取組をブラッシュアップする。



児童会によるルールメイキング



DQ Worldの実証

ステップ3

系統的なカリキュラムづくりに挑戦する

【参考】・Common Sense Education 財団のカリキュラム及び教材
・経済産業省　STEAM ライブラリー教材等



STEAMライブラリー教材
出典：国際大学GLOCOM/NHK エンタープライズ

さらに

デジタルに止まらず、すべての教育活動を通してシチズンシップ教育を推進していく必要がある。

英語を用いて互いの考えや気持ちを伝え合う活動を通して

戸田市の英語教育では、小・中9年間を通して、**互いの気持ちや考えを英語で伝え合うことができる子供の育成と中学校卒業時には英語でプレゼンテーションができる子供**を目標としている。

学習者用デジタル教科書の活用による授業改善

令和4年度は全小・中学校に学習者用デジタル教科書（外国語）が導入される

家庭と学校をシームレスにつなぐ学び

『学びの質の向上』
ー学びをデザインするー

個別最適な学びの充実

《活用例》
- イラストや写真の拡大機能を活用したリテリング
- 朗読ツールを活用した「話す・聞く活動」等
- 画像を映し出しながらの即興プレゼンテーション

《活用例》
- 音声読み上げ機能を使用し、家庭での個別の発音練習や音読練習を取り入れた反転学習

45分間授業とモジュール授業を効果的につなぐ授業の実践【小学校】

【15分間モジュール授業×3回】

●４５分間授業をより深まりのあるコミュニケーション活動にするため、４５分間授業で扱う言語材料に**「なじむ」**ことを目的に行う。
※ただ単にゲーム等を行う時間ではない。
※学習評価は、４５分間授業の中で行う。



【45分間授業】

●自分の考えや気持ちなどを伝え合う力を育むため、**言語活動が設定された授業**を行う。
※授業で行われる活動の全てが言語活動ではない。言語材料について、理解したり練習したりすることと区別される。

言語活動を行う際には、相手とのやり取りに**必然性と相手意識**を持たせるようにする。決められた表現を使った単なる反復練習ではなく、相手の思いを想像し、内容や言葉、伝え方を考え、相手と必然性のあるやり取りを行う場面を設定する。

英語によるコミュニケーションを図る資質・能力の育成を目指す授業の実践【中学校】

本物のコミュニケーション活動の充実
- 即興的なやり取り
- 対話の継続や発展
- 非言語的コミュニケーションの活用

目標に準拠した指導と評価の一体化
- Can-Doリスト形式による授業設計
- 生徒との学習到達度目標の共有



ALL Englishで進める授業
- ＡＬＴとのＴ.Ｔ授業
（リアルコミュニケーションの機会）

複数領域統合活動
- ４技能のバランスのとれた育成
- 学力調査等の活用及び分析
- 既習事項をフル活用した授業

ICTの活用例

- ◆Googleformを活用した振り返り活動や課題の提出　◆ビデオ機能を使ったSmall Talk
- ◆ロイロノート（シンキングツール）や録画機能を活用したShow & Tell
- ◆SNSを活用した、生徒同士のオンラインのやり取りを含む各活動
- ◆プレゼンテーション資料の作成　◆Jamboardを活用した英語での意見交換 ※3参照



上記の赤字表記は、今年度の重点内容として示してあります。

関連参考資料

※１戸田市立小・中学校 英語教育ブックレット2020

※２外国語教育はこう変わる！ シリーズ授業事例（小学校・中学校）

※３外国語の指導における ＩＣＴの活用について

※４学習者用デジタル教科書の活用実践事例

リーディングスキルテストの視点に基づく授業改善4
～研究校の実践に基づいた授業メソッド～

①係り受け解析：文の構造を正しく把握する。（主語・述語や修飾語・被修飾語など）
②照 応 解 決：代名詞が何を指しているかを正しく認識する。（「これ」「それ」「その～」など）
③同 義 文 判 定：与えられた二文が同義かどうか正しく判定する。
④推　　論：既存の知識と新しく得られた知識から論理的に判断する。
⑤イメージ同定：文と非言語情報（図・グラフなど）を正しく対応づける。
⑥具 体 例 同 定：辞書の定義を用いて、新しい語彙とその用法を獲得したり、理数的な定義を理解し、その用法を獲得したりする。

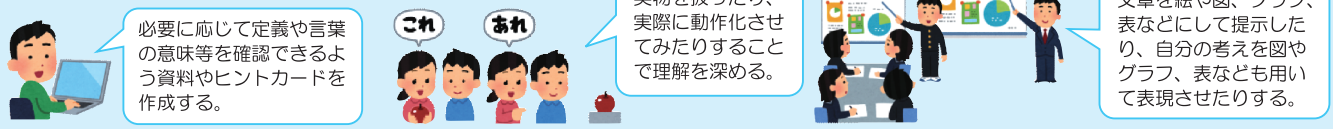
左記のＲＳＴの６つの視点を基に児童生徒のつまずきを防ぎ、児童生徒自身が教科書を正しく読み、判断できるように、授業改善を行うことが重要である。

Ⅰ 子供たちのつまずきを防ぐための教材研究

□ 教科書を読み、本単元や本時の授業でおさえる言葉を確認し、授業プランを検討する。
下記の教材研究シートや研究校の取組を参照

教材研究シート → 研究校の取組１ 授業の基本構成 → 研究校の取組２ 教科別発問集 → 〈国語〉 〈社会〉 〈算数〉 〈理科〉

◆教材研究を生かす工夫例



Ⅱ 子供たちの学びを支援するための授業展開



◆課題やめあて、学習内容の明確化

□ 本単元や本時の授業の課題やめあてを丁寧に確認し、児童生徒自身に学習活動を理解させる。

〈課題やめあての確認の活動例〉



・課題やめあてを教師と一緒に書いたり（共書き）、視写させたりしてから、音読する。
・既習事項で今回の学習に使えるものはないか、どんなことを学習すればよいかを児童生徒が考えるようにする。

◆発問の工夫

□ 児童生徒の理解が曖昧な点について切り返し発問を行う。

〈切り返し発問を行う場面の例〉

①児童生徒の発言が抽象的なとき➡「～ってどういうことですか。他にはどんなもの(例)がありますか。」
②理由や根拠があいまいなとき➡「どうしてそう思ったのですか。」「教科書のどこに書いてありますか。」
③児童生徒の考えを深めたいとき➡「～と～は同じでしょうか。」「～の場合はどうですか。(反例を示す)」

◆まとめ・振り返りの充実

□ 本単元や本時の授業で学んだ用語や知識を使って、文章を書いたり、問題を解いたりする場面を設ける。
□ 本単元や本時の授業の振り返りをさせ、子供たちに学習内容を言語化させる。



〈振り返りの例〉

①今日の授業で「分かったこと」「分からなかったこと」を書いてみよう。
②次回の学習をする自分にアドバイスをメッセージにして残そう。
③もっと知りたい点や学習したいことを考えてみよう。

Ⅲ 子供たちの学習状況を確認するための授業分析

□ 振り返りやテストの結果等から児童生徒が正しく学習用語や定義等を理解しているかを確認する。

Ⅰ 分析を生かして、次回の教材研究を行うことで、着実な授業改善につながる。

データ利活用による授業改善の進め方

① データ利活用の考え方

学習指導要領総則の解説には「各学校においては、**各種調査結果やデータ等を活用して、児童生徒や学校、地域の実態を定期的に把握し、そうした結果等から教育の目的や目標の実現状況や教育課程の実施状況を確認し分析して課題となる事項を見いだし、改善方針を立案して実施していく**ことが求められる。」と示されている。一見するとデータ利活用は「学校として取り組むもの」と思われるかもしれないが、個々の教師の活動の積み重ねが学校の教育課程であること、データ利活用が授業改善の一側面であることを考えると、データの利活用は教育活動をより良くするための**普遍的・日常的でポジティブな営み**であるといえる。

これらを踏まえて、日々の活動に以下のような実践例を各学級で取り入れることで、様々な視点で子供たちを見取り、子供たちの思いを反映させられるような授業改善を進めていくことが望ましい。

子供たちの変容のために現状を定量的に把握することからスタートし、
R-PDCAサイクルを適切に回すことで**学習指導等の在り方を変えていく**ことが重要。

R 現状の把握・分析・共有 ➡ **P 目標設定・課題の共有** ➡ **D 実 施** ➡ **C 評 価**

必要に応じて補足調査

A

② データ利活用の実践例とポイント

（例）授業の理解度や教科への興味関心を高めたい ➡ **R**で「授業がわかる調査の項目」を流用

R 授業がわかりますか？（理解度）
授業が楽しいですか？（興味関心）を開く
（Google フォーム活用で短時間で可能となる）

※特定の教科のみでもよい。（例：社会のみ、理科のみ）
※五件法（５つの選択肢から選ぶ）が分析しやすい
※市では肯定的な回答の割合の和を指標としている。
（理解度なら「よくわかる」と「だいたいわかる」の和）
※必要に応じて理由を一緒に回答させる。

結果例

パターン①	パターン②
興味関心は高いが理解度が低かった	理解度は高いが興味関心が低かった

Point：計画や目標を立てるには、R（Research）により**子供たちの現状を可能な限り把握**しておくことが大切。

P 結果の理由や背景を分析し、解決策やその目標を設定する。

パターン①
例えば、分析の観点に過去の「指導の重点・主な施策」のグッドプラクティスを用いる。特に自分で実践できていないポイントがあれば、次の単元や次の学期では必ず毎回の授業でそのポイントを実践するといった目標を設定する。

パターン②
学習内容の意義を伝えられているか、子供との関係性を構築できているか、子供は安心して授業に臨めているかなど、「楽しさ」を様々な子供の視点に立って検討する。そこから自分で仮説を立て、仮説に応じた具体的な解決策を設定する。

Point：解決策はできるだけ**具体的**に、**期間**（この例の場合は単元ごとや学期ごと）も含めて設定する。

D 設定した解決策を実施する。

C 設定期間終了後に同じ質問を行い、解決策の効果を検証、必要に応じて補足的な調査を行う。

A 次のサイクルを回す。

Point：数値は参考にするが、**子供の見取りを大事**にする。そして設定した指標の観点で**自分の行動を振り返り、行動改善できたかが重要**である。

Rの別の視点

自分の授業実践を振り返りたい
➡**R**で「埼玉県学調の質問紙項目」を流用



質問例：〇学期の◇◇（教科）の授業で次のようなことはどれくらいありましたか？
■授業の始めに、今日はどんな学習をするのかをつかんでから学習に取り組んだこと
■授業の終わりに、授業で学んだことをふり返り、自分がわかったことやわからなかったことを理解したこと

Point：指導実践に対する認識は、教師と子供の間でギャップが生じやすい。上記の質問はそれぞれＡＬ指導用ルーブリックにおいて授業の根幹としている視点１と視点５に関するもので、授業の見通しと振り返りを実践できているか**子供の視点で確認**できる。

Researchの入口

児童生徒向けのアンケート（Google フォーム）をGoogleドライブ上に保存

インクルーシブ教育の充実に向けて

～多様な子供たちがいることを前提とした支援のために～

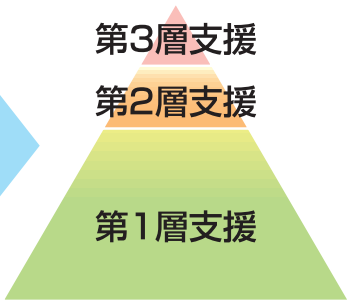


通常学級にも、多様なニーズのある児童生徒がいます

- 認知特性
- 不登校傾向
- 発達障害
- 文化や言語
- ギフテッド
- 家庭環境

「誰一人取り残すことのない」学びのためには、多様な子供を想定した
第１層支援（学校・学級全体を対象とした支援）の充実が大前提





第１層支援で支援できる幅を広げることで、個別支援を必要とする第２層・３層の子供への適切な支援がさらに可能になります。



第１層支援の充実のための振り返りポイント

①学級雰囲気は整っていますか？

誰もが学びやすい環境づくりのためには、学級雰囲気を整えることが最重要となる。環境調整や他者を尊重する雰囲気づくりなど、学習環境が整っているか確認する。

学級雰囲気
チェックリスト

②多様な学び方が用意されていますか？

学習に参加しやすい方法・表現の方法・理解の方法は、一人一人得意なやり方が異なる。あらかじめ複数の選択肢を準備することで、子供が自分にあったやり方を選択できるようにする。教師の支援の幅を広げることにもつながる。





（例）覚えるとき
・書いて覚える
・絵と結びつけて覚える
・動画で覚える

一人一人得意な学び方はちがう



（例）考えを伝えるとき
・絵で表現する
・文章で表現する
・映像で表現する

③支援が適切だったか、振り返りができていますか？

適宜、支援の工夫について振り返るようにすることが大切。ポイントは、「その子供が学びに向かえたか」「理解が深められたか」である。「支援をしたはずなのに、うまくいかなった」と思う場合は、上記①②を再度確認するとともに、別の支援策を検討する必要がある。

学校全体の仕組みづくりや教材を用いて更なる第１層支援の充実を図りましょう

学校生活　**学校・学級全体で取り組むポジティブな行動支援**

（例）
- 学校全体で望ましい行動を具体的に設定する。
- 望ましい行動のモデルを教師と子供で共有する。
- 具体的な支援計画を立てて実行し、数を記録する。
- 学校・学級の取組の成果を掲示し、可視化する。
- 成果に応じて行動の前後を修正する。

令和3年度　指導の重点・主な施策

「ポジティブな行動支援（PBS）とは？」

「学校全体で取り組むポジティブな行動支援」



学　習　**多層指導モデルＭＩＭ**

（例）
- 低学年の全学級が毎月「めざせ　よみめいじん（アセスメント）」に取り組み、クラスのつまずき傾向を捉えながら指導する。
- デジタル版のMIMで、一人一人のつまずきに応じた学習に取り組む。
- 3rdステージの子供の支援体制を校内で検討する。

令和元年度　指導の重点・主な施策

「多層指導モデルＭＩＭを用いた読みの流暢性の育成」

プログラミングを各教科等の学びに活用する段階へ

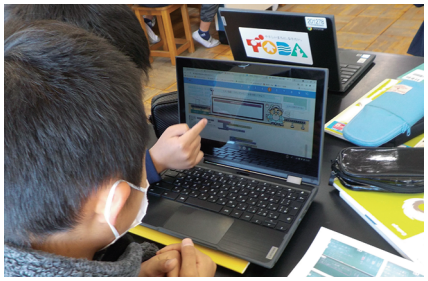
【戸田市プログラミング教育小・中一貫カリキュラム】

主に、小学校１年生～３年生	主に、小学校４年生～６年生	主に、中学校１年生～３年生	
アンプラグド・プログラミング	ビジュアル・プログラミング	フィジカル・プログラミング	高等学校情報科へ接続
プログラミング的思考に慣れ親しむ活動や簡易ロボット教材によるコンピューティングへの接続	「Scratch」を通して、コンピュータープログラミングの**基礎的スキル**の習得と楽しさを味わう活動	ロボット教材等を活用し、**課題解決にプログラミングを使う**有用性や楽しさを味わう活動	
基礎的なプログラミングのスキルや思考の習得 →		各教科等やＰＢＬにプログラミングを活用する	

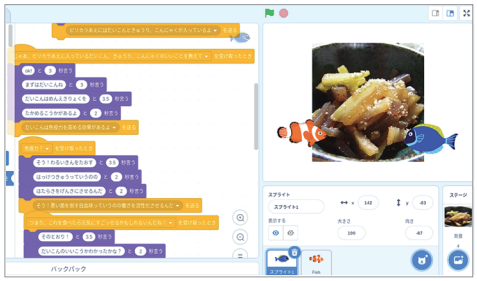
戸田市では、小中一貫カリキュラムによる取組を通して、学年が上がるにつれてプログラミングの基礎的なスキルと経験が積み重ねられてきている。そうした中で、各教科等の学習において、以下のようにプログラミングをまとめや表現に活用したり、課題解決の方法として位置付けたりする実践が創出されてきている。こうした実践はＳＴＥＡＭ教育の視点からも有意義であり、身に付けたプログラミングを各教科等で「活用する」実践を積極的に進めていく。

【参考】過去の資料

H31年度　R2年度



理科「水溶液」の単元のまとめとして、水溶液の性質をもとに、数種類の水溶液を特定するプログラムを作成。



学校の給食の残菜を減らすために、下級生に向けて、栄養素を伝えたり、食べる楽しさを伝えたりするゲームをScratchで作成。



身近な課題を解決するために、IoTブロックを使って、センサーで人を感知したら時間を計測し、音や光で時間を知らせる装置を作成。

一人一台端末活用に伴うセキュリティ確保チェックリスト

端末の活用が進む中、セキュリティの確保も必要性を増している。以下に、授業利用において**最低限守るべき事項**を列挙している。折に触れて自身の取組等の振り返りに活用し、セキュリティの確保に努める。

【教師自身のセキュリティ】

- ☐ 指導者用端末から離れる際には、ロック画面にしている。（※ショートカットキー「Windows ＋ L」が便利）
- ☐ 見える場所にパスワードを記した付箋等を貼らないようにしたり、指導者用端末にパスワードを入力する際に児童生徒が近くにいないようにしたりしている。
- ☐ Googleドライブの各ドライブの特性や権限を理解し、適切にファイルの保存をしている。
- ☐ Googleドライブには個人情報（画像含む）を含むデータを保存していない。

【児童生徒のアカウントや端末の管理及び指導】

- ☐ 児童生徒のアカウントを適切に管理（端末・アカウント名簿に記載）している。
- ☐ アカウント（IDやパスワード）の役割を説明し、パスワードは他の人に教えないことや、忘れたり、漏洩したりした場合はすぐに教職員に報告することなどを指導している。
- ☐ 端末が動かない、勝手に操作されている、普段と異なる画面が出ているという症状が出た場合、すぐに教職員に報告するよう児童生徒に指導している。

【権利に関する指導】

- ☐ 動画や写真の撮影を行う場合は、相手の許可を得てから行うことを指導している。
- ☐ 個人情報保護、人権や著作権者への配慮、安全性（セキュリティ）やネットワーク上でのルール・マナーについて、児童生徒に注意を促す指導の機会を設けている。
- ☐ 著作権について発達の段階に即して指導している。

（※参考資料は「戸田市ICT活用推進ポータルサイト(P. 7･8)」にリンク掲載）